

弥生時代における銅鏡受容の地域差

— 山陽地域を中心に —

實盛 良彦

1. はじめに

弥生時代に初めて日本列島に流入した銅鏡は、倭人の好みに合致したのか、その後盛んに輸入され、さらには日本列島においても製作がおこなわれた。このような銅鏡受容の様相については、種々の検討がおこなわれているが、まだ明らかにされているとは言い難い点が存在する。そこで本稿では、日本列島に銅鏡が流入した弥生時代における銅鏡の受容状況について、検討をおこないたい。

弥生時代に流入した銅鏡については、北部九州地域においては早くから多量の銅鏡が副葬される一方、近畿地域においては後の古墳時代になってから銅鏡が多量に副葬されており、地域によって銅鏡の取り扱いに差があったことがうかがわれる。その両地域に挟まれた山陽地域は、岡山県楯築墳丘墓などの存在に代表されるように、弥生時代後期における重要地域の一つであると言える。また山間部にあっても、四隅突出型墳丘墓の存在にみられるように、その重要性は衰えるものではない。しかし、銅鏡に関しては、いずれも弥生時代小形倣製鏡⁽¹⁾の製作地と考えられている(田尻 2012 等)、北部九州地域と近畿地域の間にあって、あまり多くの面数が出土しているとは言えず、顧みられる機会はずしも多くはない。本稿ではそのような両地域に挟まれた山陽地域における銅鏡の受容状況を探り、その様相を明らかにすることで、弥生時代の日本列島における銅鏡受容状況を解明する一助としたい。

2. 弥生時代における銅鏡受容についての研究概観

弥生時代の銅鏡受容の地域傾向について、弥生時代に銅鏡が集中する北部九州地域については、その分布傾向から政治体制や地域間関係の考察へと昇華するような検討がおこなわれている。高倉洋彰は、北部九州に弥生時代中期に伝来開始した前漢鏡について検討し、北部九州の地域社会を統べる権力を担う首長(王)によって前漢鏡は権威の象徴としての性格を付与されたと考えた(高倉 1993)。糸島平野と福岡平野で一墓に際立った集中をみせるのに対し、他地域では一墓一面ないし数面の副葬であることから、それぞれを核とする地域連合の存在を想定した。

藤丸詔一郎は破鏡を中心に北部九州の出土事例を考察し、北部九州において、筑前・豊前北東部では墳墓に副葬され、豊後の大野川流域などでは住居等へ廃棄され、それ以外の地域では副葬例と廃棄例が混在するという三つの地域類型がみられることを指摘した(藤丸 2000)。このような破鏡の取り扱いの違いから、それぞれの地域で破鏡の持つ意味が異なっていたものと考えた。

一方、近畿地域については、弥生時代遺跡からの銅鏡出土例は北部九州地域に比して少なく、小林

行雄の伝世鏡論（小林 1955）などでは銅鏡は古墳時代まで「伝世」し古墳に副葬されたと説明されていた。その当否は置くとして、純粋に出土状況から弥生時代の近畿地域における銅鏡受容を検討したのものとしては、寺沢薫と森岡秀人のものなどが挙げられよう。寺沢は、弥生時代の近畿以東における中国製鏡の出土例が北部九州地域に比べて圧倒的に少なく、その多くが「鏡片や懸垂鏡」であることを指摘した（寺沢 1991）。そして、「中国鏡の近畿への流入には北部九州を経由しての第Ⅳ様式期に顕在化するものと、庄内式期以降の2つの画期が想定される」とし、それらの背景にそれぞれ、第1画期には「北九州諸国の新たな権力再編に対する東方諸地域での緊張関係の現出」、第2画期には「畿内を本拠とする初期ヤマト政権による瀬戸内ルート of 掌握と新たなルートの開拓」という誘因を求めた。

森岡秀人は、前漢鏡そのものの近畿への受容は弥生時代後期初頭にさかのぼるが、銅鏡の本格的浸透は「小形仿製鏡」によるものとし、それらおよび破鏡について、弥生時代後期の資料が生活跡と深くかかわる可能性を指摘した（森岡 1993）。弥生時代終末期以前は銅鏡受容の主体となり得る中心勢力は畿内に存在せず、基本的には偶発的な流入であったと考え、弥生終末期には諸集落の再編が進行したことに加えて、庄内式期前後に分割された鏡の遺棄や副葬が偏ることを指摘し、その段階に完鏡大量受容の主体が成立したと考え、対中国外交主導権が畿内に確立されたと想定した。

こうした北部九州・近畿の両地域の間であって、山陽地域の存在は両者の地域間関係を検討する上で重要である。この地域における銅鏡受容については、渡部明夫、妹尾周三、松木武彦、田崎博之、松本佳子の検討を主なものとして挙げ得る。渡部は中国四国地域における銅鏡出土例に言及し、「玄界灘に面した下関市付近では中期に多鈕細文鏡や内行花文精白鏡の副葬がみられるなど、北部九州と同様な様相を示す」と指摘し、それより東には青銅器の副葬は後期前半頃までは拡大せず、「弥生時代後期になると、墳墓や集落から舶載鏡の出土例が増加する」とした（渡部 1991）。

妹尾周三は弥生～古墳時代の中国・四国地域出土鏡を集成し、渡部と同様、同地域では弥生時代後期になって中国製銅鏡が流入すると指摘した（妹尾 1994）。また、集成内容から同地域では山口県西部を除き弥生時代に鏡鑑をはじめとする遺物を墳墓に副葬する風習はなかったと考えた。

同年松木武彦は山陽地域の前期古墳出土鏡を主眼に置いた検討をおこなう中で、弥生時代終末期までは、吉備地域の大型首長墓において銅鏡副葬は極めて稀であることを述べた（松木 1994）。吉備を中心とする伝統的な首長墓祭祀の体系の中には、銅鏡副葬という要素は元来含まれていなかったとし、弥生時代終末期に、中国製銅鏡を首長墓に副葬する例がみられるようになること、また集団墓クラスの副葬の一部に弥生系の「小型仿製鏡」が散見されることを指摘した。そしてその分布や副葬面数などから、それらの銅鏡は多様な製作、流通形態の中から自在に入手したものであることを想定した。

田崎博之は瀬戸内地域における中国製銅鏡からみた地域間交流関係を検討した（田崎 1995）。この地域においては弥生時代中期後葉～後期前半までの鏡は、鏡片の破面研磨等がなく、単なる青銅製品として持ち込まれた可能性が高く、北部九州地域と瀬戸内地域との政治的な交流を読み取ることは

できないとした。一方弥生時代後期後半には銅鏡の出土例が増加することから、搬入土器等の検討により読み取れる広域的な交流システムにより銅鏡も瀬戸内地域へもたらされたとした。瀬戸内地域社会が北部九州地域と政治的な関係を結んで入手したと考え、各地で個々に中国の漢王朝から直接入手したとは考えられないと述べた。加えて、鏡が点的な分布にとどまることから、そのような鏡に象徴される政治的な交流は地域によって受け入れに差があったとした。それが弥生時代末～古墳時代初頭になると鏡の分布が一気に西日本全域へ広がると指摘し、鏡に象徴される政治的な関係が西日本全域で受容されたと考えた。

松本佳子は瀬戸内地域における「小形仿製鏡」に主眼を置いて検討をおこない、西部瀬戸内地域では鏡が集落廃棄される例が多いのに比べ、中部瀬戸内地域以東では墳墓に副葬され、鏡に対する新たな価値の創出が生じており、「古墳時代の開始とともに起こる新たな鏡社会の誕生の先駆け」と指摘した（松本 2008）。また、瀬戸内の各地で「小形仿製鏡」が在地で生産されたという考えをもとに、瀬戸内地域では中国製完形鏡に加えその破鏡も入手困難であったと考え、「小形仿製鏡」の破鏡を中国製鏡の破鏡の代用品としていた例があると想定した。

2000 年代以降はこうした地域ごとの検討を俯瞰して地域間関係や銅鏡の流通システムを検討する試みが続いており、成果を上げている（平尾 2007、上野 2014、南 2016 など）。しかしながら、これらの諸成果においては、瀬戸内地域を一絡げに論じる傾向があり、九州地域において藤丸がおこなったように小地域ごとの十分な検討がなされているとは言い難い状況にある。初期の検討において渡部が「下関市付近」の状況を指摘したように、小地域ごとの傾向をつかむことが重要と考える。そこで本稿では、山陽地域における小地域ごとの傾向を再検討することで、弥生時代において銅鏡が東伝し受容されていく状況を明らかにすることとしたい。

3. 分析対象

本稿で分析の対象とする「山陽地域」は、長門地域、周防地域、安芸地域、吉備地域（律令制の備後、備中、備前、美作）とした（おおそ現在の行政区画の山口県、広島県、岡山県）。山陽地域では弥生時代遺跡から出土している銅鏡の分量が比較的少なく、対象時期はいわゆる庄内式期まで含めた検討をおこなった。なお、遺跡の時期については、各報告書等に基づきながら、妹尾(1994)、寺沢(2005)、吉田(2006)、辻田(2007)等により調整を加えた。鏡の分類・編年は、小形倣製鏡は高倉(1990)と田尻(2012)に基づき、中国製鏡は岡村(1984・1993・1999)に基づいた。なお、いわゆる漢鏡 7 期については筆者の理解は異なる点があり（實盛 2012・2015・2016）、「漢鏡 7 期～魏代」の意味で、「漢鏡 7 期」と表記した。

上記の条件に基づいた山陽地域の弥生時代銅鏡の一覧が表 1 である。地域別の点数をみると、備前では 11 点、美作では 2 点、備中 5 点、備後 3 点、安芸では 7 点、周防 10 点、長門では 7 点で、合計 45 点の、弥生時代遺跡出土銅鏡が管見に及んだ（表 1）。

表 1 山陽地域出土弥生時代後期を中心とした銅鏡一覧

No.	県	旧国名	市町村	遺跡名	形態	径(cm)	残存状況	分類・編年	遺跡	遺跡時期
1	岡山県	備前	赤磐市	便木山遺跡	小形做製鏡	7.25	欠損	高倉内行Ⅲb、田尻内5	土壙墓群	庄内式併行期
2	岡山県	備前	赤磐市	用木2号墓第3主体部	小形做製鏡	6.00	完形	高倉内行Ⅱa、田尻内2b	方形台状墓(22m)	庄内期～古墳前期
3	岡山県	備前	赤磐市	用木2号墓第1主体部	方格規矩鏡	9.80	完形	岡村Ⅱ、漢鏡4期	方形台状墓(22m)	庄内期～古墳前期
4	岡山県	備前	赤磐市	さくら山方形台状墓	小形做製鏡	7.15	完形(穿孔)	高倉内行Ⅱa、田尻内2b	方形台状墓(9.5m)	庄内期～古墳初頭
5	岡山県	備前	赤磐市	桜山2号墓	斜縁鏡	9.20	鏡片(破鏡)	漢鏡7期(飛禽鏡)	方形台状墓	庄内期～古墳前期
6	岡山県	備前	岡山市	吉備東山遺跡	小形做製鏡	不明	鏡片	(内行花紋鏡系)	集落(土坑)	弥生後期
7	岡山県	備前	岡山市	雲山鳥打2号墳丘墓	不明	不明	鏡片	不明	方形台状墓(20m)	庄内式併行期
8	岡山県	備前	岡山市	足守川加茂B遺跡	小形做製鏡	6.70	完形	高倉重Ⅲb、田尻重3	集落(土坑)	弥生後期後半～庄内期
9	岡山県	備前	岡山市	足守川加茂B遺跡	小形做製鏡	4.40	完形	高倉重ⅢⅠb、田尻重1う	集落(堅穴建物)	庄内期～古墳初頭
10	岡山県	備前	岡山市	矢藤治山墳丘墓	方格規矩鏡	16.40	欠損	岡村ⅤC、漢鏡5期	前方後円形墳墓(35.5m)	庄内期～古墳初頭
11	岡山県	備前	岡山市	百間川原尾島遺跡	小形做製鏡	8.70	欠損	高倉内行Ⅲb、田尻内5	集落(土坑)	庄内式併行期
12	岡山県	美作	津山市	樋ノ内池南遺跡	小形做製鏡	8.40	完形	高倉位至三公	集落	弥生時代?
13	岡山県	美作	津山市	下道山遺跡J地点	異体字銘帯鏡	13.60	鏡片	漢鏡4期	墳墓(表面採集)	弥生後期前半
14	岡山県	備中	総社市	横見墳墓群11号墓	小形做製鏡	5.30	完形	漢鏡7期	方形台状墓(8m)	庄内式併行期
15	岡山県	備中	総社市	鎬物師谷1号墓	平縁飛雲鏡	9.70	完形	漢鏡7期	前方後円形墳墓(38m)	庄内期～古墳初頭
16	岡山県	備中	総社市	山屋敷遺跡	重圓紋鏡	5.30	完形	高倉重ⅢⅠb、田尻重1う	集落(堅穴建物)	弥生後期
17	岡山県	備中	総社市	刑部遺跡	内行花紋鏡	不明	鏡片	漢鏡5～6期	集落(堅穴建物)	弥生後期
18	岡山県	備中	福山市	龜山遺跡	不明	不明	鏡片(破鏡)	不明	集落(溝)	弥生後期～庄内期
19	岡山県	備中	福山市	神辺御領遺跡E地点	細縁式獸帯鏡	不明	鏡片(破鏡)	岡村Ⅳ、漢鏡5期	集落(溝)	弥生後期～古墳前期
20	岡山県	備中	福山市	城山A遺跡	内行花紋鏡	不明	鏡片(破鏡)	田座、漢鏡6期	墳墓(土坑付近)	弥生後期
21	岡山県	安芸	北広島町	京野遺跡	内行花紋鏡	16.25	完形	岡村Ⅰ、漢鏡5期	土壙墓(箱形木棺)	弥生後期～庄内期
22	岡山県	安芸	北広島町	京野遺跡	異体字銘帯鏡	8.00	鏡片	漢鏡4期	集落(堅穴建物)	弥生後期後半
23	岡山県	安芸	北広島町	金鑛谷遺跡	内行花紋鏡	18.70	鏡片(破鏡)	漢鏡5期	集落(段状遺構)	弥生後期後葉
24	岡山県	安芸	安芸太田町	池の内遺跡	内行花紋鏡	不明	鏡片(破鏡)	漢鏡5期	墳墓・集落(試掘調査)	弥生後期末～古墳初頭
25	岡山県	安芸	安芸太田町	毘沙門台遺跡	重圓紋鏡	6.00	完形	四葉座、漢鏡5期	集落小墳墓(堅穴建物付近)	弥生後期か古墳中期
26	岡山県	安芸	広島市	真亀C地点遺跡	小形做製鏡	6.20	完形	高倉重ⅢⅠa、田尻重1あ	集落(堅穴建物)	弥生後期前半
27	山口県	周防	岩国市	奥ヶ原遺跡	内行花紋鏡	11.40	鏡片(破鏡)	漢鏡5～6期	集落(堅穴建物)	弥生後期
28	山口県	周防	周南市	伝八代	内行花紋鏡	14.80	欠損	四葉座、漢鏡5期	不明	弥生時代?
29	山口県	周防	周南市	岡山遺跡	小形做製鏡	7.10	完形	高倉内行Ⅰb、田尻内2a	土壙墓	庄内式併行期
30	山口県	周防	山口市	朝田墳墓群第Ⅰ地区第13号石棺墓	小形做製鏡	7.60	完形	高倉内行Ⅱa、田尻内2b	箱形石棺	庄内式併行期
31	山口県	周防	山口市	朝田墳墓群第Ⅱ地区第3号台状墓	内行花紋鏡	10.20	欠損	岡村扁蝸蟬座Ⅱ、漢鏡6期	方形台状墓(16m)	庄内期～古墳前期
32	山口県	周防	山口市	朝田墳墓群第Ⅱ地区第7号台状墓	小形做製鏡	8.00	欠損	田尻内3a	方形台状墓(7.6m)	庄内期～古墳前期
33	山口県	周防	山口市	朝田墳墓群第Ⅱ地区第8号台状墓	重圓紋鏡?	4.30	完形	高倉重Ⅲ	方形台状墓(12.7m)	庄内期～古墳前期
34	山口県	周防	山口市	大内氏閑連町並遺跡	重圓紋鏡	不明	鏡片	(銅鏡ではない可能性有)	集落(土坑(土壙墓?))	弥生後期以降
35	山口県	周防	山口市	下東遺跡	内行花紋鏡	13.30	鏡片(破鏡)	漢鏡5～6期	集落(河川)	弥生後期以降
36	山口県	周防	防府市	切畑南遺跡第3地区	不明	12.00	鏡片	不明	集落(表土層)	弥生時代
37	山口県	長門	下関市	秋穂遺跡	小形做製鏡	6.30	欠損	高倉内行Ⅱa、田尻内2a	土壙墓	弥生後期
38	山口県	長門	下関市	延行条里遺跡	小形做製鏡	7.50	完形	(9弧内行花紋鏡)	集落(包含層)	弥生以降
39	山口県	長門	下関市	地蔵堂遺跡	異体字銘帯鏡	14.90	欠損	岡村Ⅲ、漢鏡3期	箱形石棺	弥生中期後半
40	山口県	長門	下関市	梶栗浜遺跡	多鈕細紋鏡	8.80	欠損	(3鈕)	箱形石棺	弥生前期
41	山口県	長門	下関市	土井ヶ浜遺跡	小形做製鏡	7.70	完形	高倉内行Ⅱb、田尻内3a	墳墓(包含層)	庄内式併行期
42	山口県	長門	下関市	土井ヶ浜遺跡	小形做製鏡	6.50	完形	高倉綾杉、田尻綾杉	墳墓(包含層)	庄内式併行期
43	山口県	長門	下関市	柳瀬遺跡	内行花紋鏡	不明	鏡片(破鏡)	岡村Ⅱ、漢鏡5期	集落(土坑)	弥生後期

4. 山陽地域における銅鏡の流入時期

さて、山陽地域における銅鏡流入のもっとも古い出土例は、山口県梶栗浜遺跡の多鈕細紋鏡（弥生時代前期）を挙げることができよう⁽²⁾（図1－1）。中国製鏡流入の嚆矢は山口県地蔵堂遺跡で出土した漢鏡3期の異体字銘帯鏡であろう。この鏡のみが弥生時代中期の例とされている。長門地域西部（現下関市域）は立地上北部九州地域に近く、この鏡の入手には北部九州地域と何らかのかかわりがあったと考えられる。長門地域西部はこの鏡を含め本州としては早くから鏡を墳墓に副葬する習俗がおこなわれており、この点からも北部九州地域とのかかわりを想定することができるだろう（濱崎1997）。

この鏡以外に弥生時代中期にさかのぼる銅鏡出土例は知られていないが、岡山県下道山遺跡では異体字銘帯鏡片が採集されている（図1－2）。遺跡は津山盆地に位置しており、後に美作国府が置かれる場所の付近に当たり交通の要衝である。後に調査された墳墓群に伴うならば、弥生後期前葉の可能性も想定できる資料である。広島県京野遺跡でも異体字銘帯鏡片とされる鏡が出土している（図1－3）。銘文からはいわゆる「昭明」鏡とされ、漢鏡4期のものとみられる。

なお、表には含めなかったが、広島県の中出勝負峠8号墳（古墳前期）でも漢鏡4期の異体字銘帯鏡が破碎されて出土している（図1－4）。しかし、この鏡は紋様の状態からみると当該期の製作ではない可能性がある。このように紋様の状態からみて疑問が残る鏡

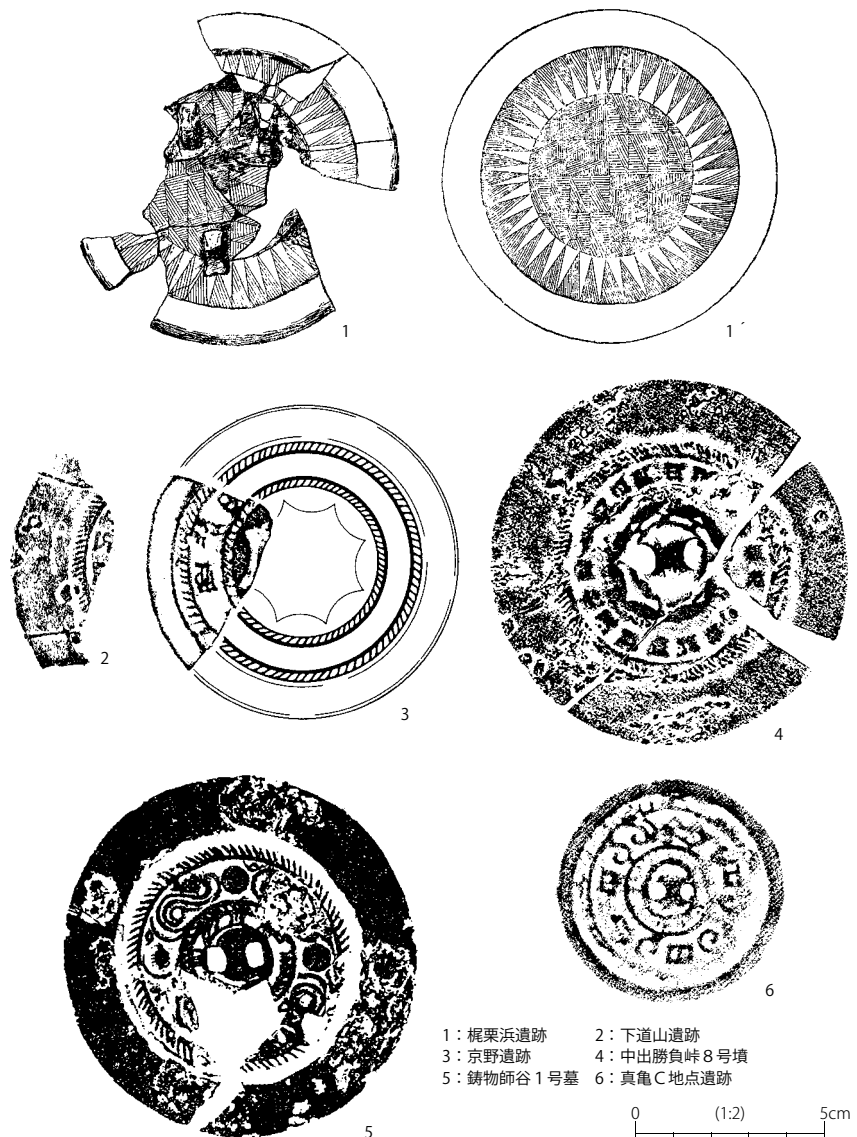


図1 山陽地域における銅鏡流入にかかわる鏡

としては、岡山県鑄物師谷1号墓出土の虺龍紋鏡（漢鏡4期）もある（図1－5）。漢鏡4期の鏡は一定数の出土がみられるが、その紋様の状態などから編年通りの時期の製作とするには躊躇される資料も存在することは注意する必要がある。これらの鏡の製作時期と出土時期の差を直ちにいわゆる伝世等の結果とみるには慎重でなければならず、個々の鏡の詳細な観察から見極めていかねばならないだろう（實盛 2013a）。

小形倣製鏡のもっとも古い時期の例としては、広島県真亀C地点遺跡出土鏡が弥生後期前半の竪穴建物から出土している（図1－6）。この鏡は弥生後期初頭の製作とされ（田尻 2012）、最古段階に位置付けられている鏡である（高倉 1990、田尻 2012）。このことから、この鏡は製作からほどなくもたらされ、それからいわゆる「伝世」を経ることなく廃棄されたとみることができる。

5. 長門地域西部と北部九州

次に、山陽地域内における銅鏡分布の地域傾向についてみていきたい。全体にわたる傾向としては、弥生時代後期後半までは集落での出土が多く、庄内式期になって墳墓での副葬が増えると言える。そういった中でまず注目したいのは、長門地域西部（現下関市域）の状況である。この地域では、弥生時代前期から墳墓に銅鏡を副葬する習俗がみられる。先述の梶栗浜遺跡出土多鈕細紋鏡が箱形石棺に副葬されていた（図2－1）。鉄道建設時の不時発見例であるが、森本六爾による詳細な聞き取り調査および現地踏査により、遺跡の正確な位置と出土状況が報告されており、長さ約1.8mの組合せ式箱形石棺（図は森本による復元）から、銅剣2点とともに出土した（森本 1927b）。

この習俗は弥生時代中期には先述の地蔵堂遺跡出土鏡が箱形石棺からの出土であり、弥生時代後期

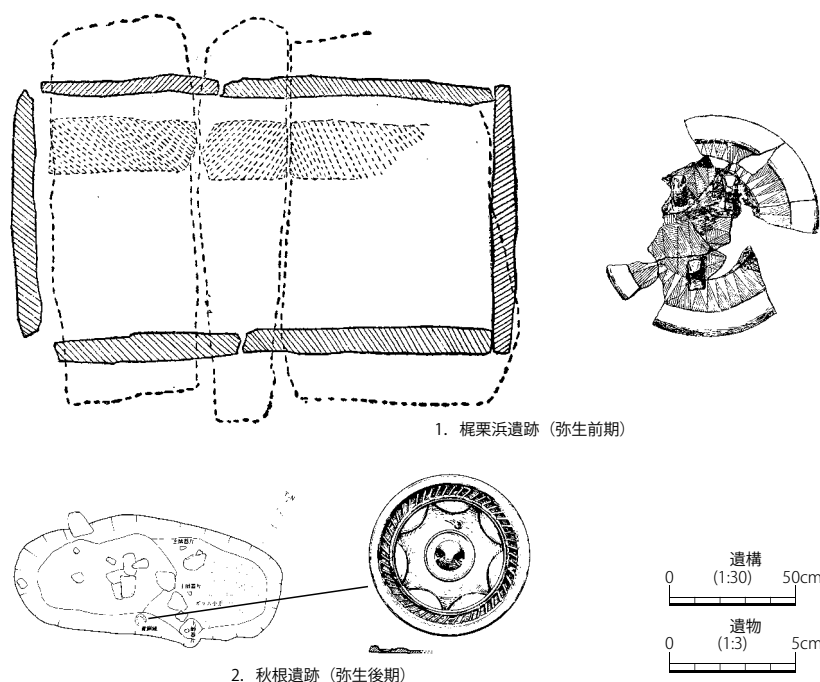


図2 長門地域西部の銅鏡副葬事例

になっても秋根遺跡で小形倣製鏡が長軸 1.08 m で平面楕円形の土墳墓から出土している点（図2－2）にみられるように、継続しておこなわれている。このような様相は、長門地域西部に隣接する北部九州地域からの影響と考えることができる。一方、長門に隣接する周防地域では、鏡が副葬品となるのは基本的に庄内式期以降である。このような様相は基本的に周防地域以東の他地域と共通してお

り、長門地域西部（現下関市域）のみ、他地域とは交流圏が異なっていた可能性があるといえる。

6. 安芸地域における銅鏡受容の特異性

次に、安芸地域に注目したい。安芸地域では、銅鏡出土例の多くが集落出土であり、そのほとんどが竪穴建物からの出土である点は特筆すべきであろう。例えば京野遺跡では径約 5.5 m の円形竪穴建物の壁溝際に掘削された径約 0.2 m の埋納坑から内行花紋異体字銘帯鏡片が出土した（図 3－1）。また、真亀 C 地点遺跡では径約 8.2 m の円形竪穴建物の壁溝内から小形倣製鏡が出土した（図 3－2）。他の地域で弥生時代後期に鏡が竪穴建物から出土しているのは、安芸地域に隣接する周防地域東部（現岩国市域）での 1 点のみである。奥ヶ原遺跡出土例がそれで、径 9.3 m の円形竪穴建物の埋土上層から内行花紋鏡の外区片が出土した（図 3－3）。これらの地域での鏡の使用形態は、他の地域とはやや異なっていた可能性がある。

このように竪穴建物からの出土が集中する地域状況は、九州の豊後地域大野川流域や（藤丸 2000）、肥後地域の菊池川中流域以南（南 2013）などでみられる状況と共通する。北部九州筑前の糸島地域付近を中心とみなした場合に、その周縁域とみなすことができる肥後地域や豊後地域および安芸地域において、同様の銅鏡使用形態が確認できることは注意すべき点であろう。

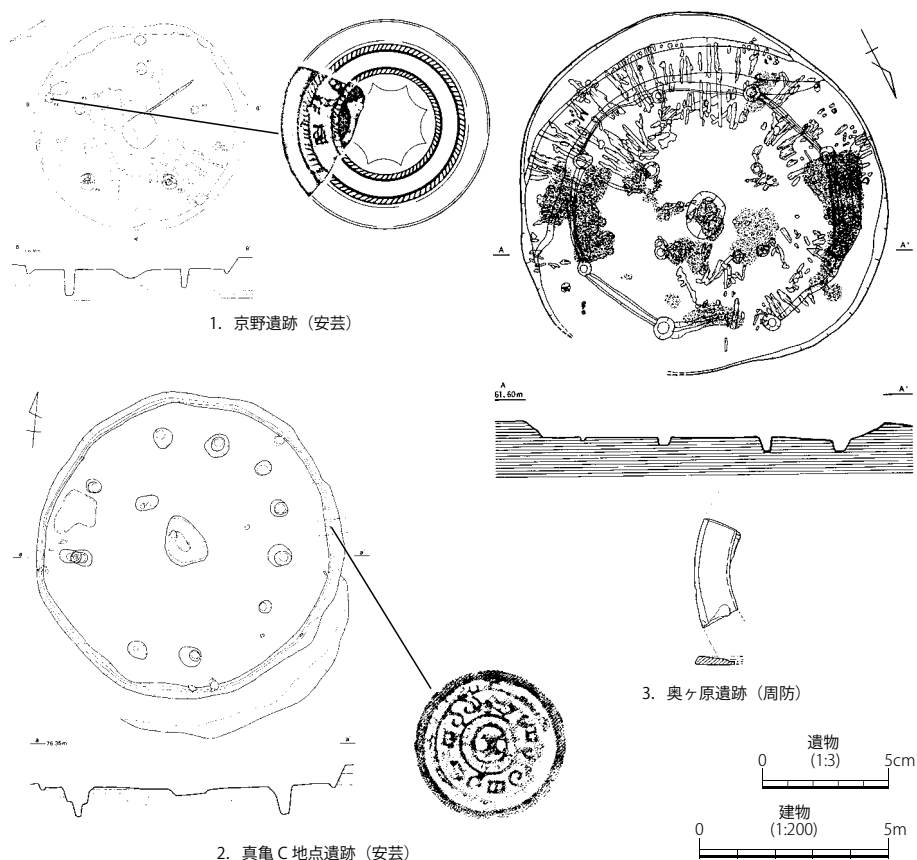


図 3 竪穴建物からの銅鏡出土事例

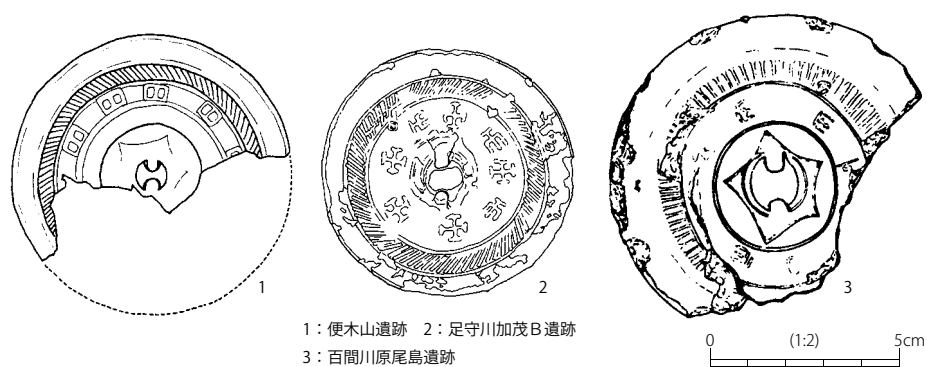


図4 備前地域出土の近畿地域製小形倣製鏡

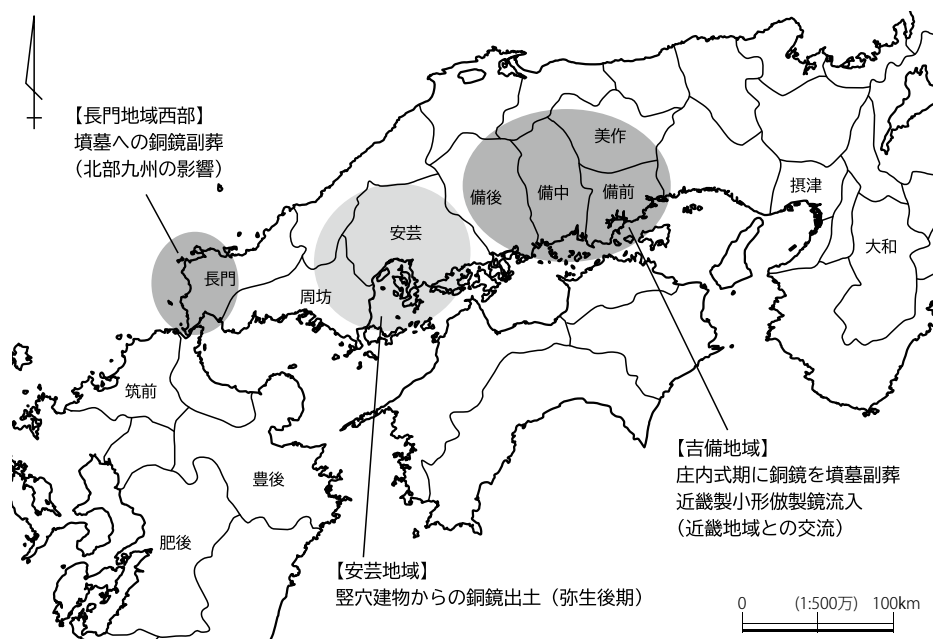


図5 山陽地域における銅鏡受容

7. 吉備地域における銅鏡受容と近畿

最後に、吉備地域の状況をみたい。吉備地域では、弥生時代後期に属する銅鏡の出土例が他の地域と比較して極端に少ない。しかし、庄内式期になると状況は一変し、多くの鏡が墳墓の副葬品としてみられるようになる。特に備前地域はその傾向が強く、7例の庄内式期とみられる墳墓副葬事例が存在する。また吉備地域で出土する鏡の中で、特に備前地域出土鏡にいわゆる「十」状紋をもつ小形倣製鏡⁽³⁾を中心とした、近畿地域製とされる小形倣製鏡(田尻分類の重圈文系3型・内行花文系5型)が含まれることは注目に値する(図4)。便木山遺跡出土鏡、足守川加茂B遺跡出土鏡、百間川原尾島遺跡出土鏡がそれであり、これらは地理的に近い近畿地域と備前地域が交流を持っていたことを示す資料であろう。

8. おわりに ―山陽地域における銅鏡の受容状況―

以上のように、山陽地域における弥生時代を中心とした時期の銅鏡について、小地域ごとの状況を検討してきた。その中で、長門地域西部（現下関市域）への北部九州地域からの強い影響があること、安芸地域で他の地域とは異なる銅鏡の用いられ方があった可能性が読み取れること、吉備地域では弥生後期までは鏡の出土量があまり多くないものの、庄内式期に比較的多くの鏡が墳墓に副葬されること、備前地域に近畿製の小形倣製鏡が流入しており、両地域の交流が読み取れることを述べてきた。

これらのことから考えると、山陽地域における銅鏡の受容状況は小地域ごとに異なった状況であったと理解できる（図5）。長門地域西部は、山陽の他地域とは異なり、北部九州地域を中心とした銅鏡受容圏に早くから組み入れられていた可能性が高く、北部九州地域と一体的な需要がなされたことが考えられる。それ以外の周防地域以東では、銅鏡受容は北部九州に遅れ、かつ鏡片等での受容が多かったとみられる。そのなかで安芸地域においては、竪穴建物での出土例が多く、弥生時代後期に独自の銅鏡使用形態が存在した可能性がある。他方、吉備地域では弥生時代後期における銅鏡出土例が少ないが、庄内式期になると墳墓副葬例が多くみられるようになる。また、近畿地域製とされる小形倣製鏡の存在が備前地域において確認でき、地理的に近い備前地域と近畿地域との交流がうかがわれる。庄内式期に墳墓副葬例が増えるのも備前地域に多くみられる傾向であることから、この地域において吉備地域以西よりも強い次代への胎動を読み取ることができよう。

このように、弥生時代後期を中心とした時期における銅鏡の使用方法是、小地域ごとに異なっている可能性が高い。詳細な検討をおこなうことで、当時の地域社会の状況をより仔細に読み取ることができたといえるだろう。今後は他地域へ詳細な検討範囲を広げることで、弥生時代社会の実態のさらなる解明へつなげていきたい。

付記

本稿は2013年7月20日に九州考古学会大会『弥生時代後期青銅鏡を巡る諸問題』資料集で紙上発表した「山陽地域における弥生時代後期を中心とした青銅鏡の動向」を骨子として、その後の成果を含めて大幅に改稿したものであり、2024年11月に京都府立大学大学院に提出した博士学位申請論文『銅鏡からみた漢末三国期の東アジア世界』の成果の一部である。菱田哲郎先生、井上直樹先生、諫早直人先生には、突然提出をお願いしたにもかかわらず、快く審査を引き受けていただき大変お世話になった。菱田先生は高校の同窓生でもあり、高校時代を過ごした自治体に奉職する身として特段のご縁を感じている。先生方の学恩に御礼申し上げます。

註

- (1) 弥生時代の小形青銅鏡の呼称については、「弥生時代小形倣製鏡」のように「倣製」の語が用いられることが多い。筆者は日本列島製の鏡については「倣製鏡」と呼ぶべきと考えているが（實盛2009）、弥生時代の小形鏡は日本列島のみで製作されたものではない可能性があるため（高倉1990、南2005、

2007 等)、「倣製鏡」と呼んでおく。すべて日本列島製という意見もあるが(田尻 2012)、その製作地の詳細については今後の研究の深化に期待したい。

- (2) 森本六爾は、(森本 1927a) で示した梶栗浜遺跡出土多鈕細紋鏡の図面を、接合に誤りがあったとして(森本 1927b) で撤回している。ここでは森本が接合に誤りがあったと明記していた箇所を削除し、図 1-1 として掲載した。
- (3) 「十」状紋をもつ小形倣製鏡は、兵庫県青谷遺跡出土の「十」状紋帯を二重にもつ鏡を最古段階とする意見と(森岡 1987、寺沢 1992)、大阪府八尾南遺跡などから出土した「十」状紋帯内側に内行花紋帯をもつ鏡を最古型式ととらえる意見(田尻 2012) とがある。しかし、これらの鏡が他の小形倣製鏡同様いずれも前漢の異体字銘帯鏡からの系譜で捉えられることを念頭に置けば、南健太郎が両鏡を「同様な文様を持つ」と述べるように(南 2009)、青谷鏡・八尾南鏡ともに元となった異体字銘帯鏡の構成に忠実な、「十」状紋をもつ小形倣製鏡としてはやや古式のものとみるべきであろう。

引用・参考文献

- 上野祥史 2014 「日本列島における中国鏡の分配システムの変革と画期」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 185 集 国立歴史民俗博物館
- 岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」『史林』第 67 巻第 5 号 史学研究会
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 55 集 国立歴史民俗博物館
- 岡村秀典 1999 『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館
- 小林行雄 1955 「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第 38 巻第 1 号 史学研究会
- 實盛良彦 2009 「斜縁神獣鏡の変遷と系譜」『帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XXIII 考古学研究室紀要第 1 号
広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室・考古学研究室
- 實盛良彦 2012 「斜縁神獣鏡・斜縁四獣鏡の製作」『考古学研究』第 59 巻第 3 号 考古学研究会
- 實盛良彦 2013a 「斜縁神獣鏡にみる鏡の摩耗と出土古墳の時期」『FUSUS』5 号 アジア鑄造技術史学会
- 實盛良彦 2013b 「山陽地域における弥生時代後期を中心とした青銅鏡の動向」『弥生時代後期青銅鏡を巡る諸問題』九州考古学会
- 實盛良彦 2015 「上方作系浮彫式獣帯鏡と四乳飛禽鏡の製作と意義」『FUSUS』7 号 アジア鑄造技術史学会
- 實盛良彦 2016 「漢末三国期の斜縁鏡群生産と画像鏡」『ヒストリア』第 259 号 大阪歴史学会
- 妹尾周三 1994 「中国・四国地方出土の中国鏡」『倭人と鏡』別冊 埋蔵文化財研究会
- 高倉洋彰 1990 『日本金属器出現期の研究』学生社
- 高倉洋彰 1993 「前漢鏡にあらわれた権威の象徴性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 55 集 国立歴史民俗博物館
- 田崎博之 1995 「瀬戸内における弥生時代社会と交流 ―土器と鏡を中心として―」『瀬戸内海地域における交流の展開』古代王権と交流 6 名著出版
- 田尻義了 2012 『弥生時代の青銅器生産体制』九州大学出版会
- 辻田淳一郎 2007 『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎
- 寺沢 薫 1991 「日本の大陸系青銅器 ③近畿以東」『日韓交渉の考古学』弥生時代篇 六興出版
- 寺沢 薫 1992 「巫の鏡」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 寺沢 薫 2005 「古墳時代開始期の歴年代と伝世鏡論(上・下)」『古代学研究』169・170 号 古代学研究会
- 平尾和久 2007 「破碎鏡と破鏡の時期的変遷とその認識」『伊都国歴史博物館紀要』第 2 号 伊都国歴史博物館

- 廣坂美穂 2008 「破鏡についての一考察」『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集』岡山理科大学埋蔵文化財研究会
- 藤丸詔八郎 2000 「後漢鏡について」『古墳発生前後の社会像』九州古文化研究会
- 古瀬清秀 1982 「広島県出土の中国鏡について (上)」『広島大学文学部紀要』第 42 巻 広島大学文学部
- 松木武彦 1994 「山陽の前期古墳と鏡」『倭人と鏡』その 2 埋蔵文化財研究会
- 松本佳子 2008 「瀬戸内における弥生時代小形仿製鏡の研究」『地域・文化の考古学』下條信行先生退任記念事業会
- 南健太郎 2005 「弥生時代小形仿製鏡の鈕および鈕孔製作技術」『鏡範研究』Ⅲ 奈良県立橿原考古学研究所・二上古代鑄金研究会
- 南健太郎 2007 「韓半島における小形仿製鏡の生産」『韓半島における青銅器製作技術と東アジアの古鏡』国立慶州博物館・奈良県立橿原考古学研究所・アジア鑄造技術史学会
- 南健太郎 2009 「近畿地方における漢鏡・小形仿製鏡の拡散と銅鏡生産」『月刊考古学ジャーナル』No.582 ニューサイエンス社
- 南健太郎 2010 「破鏡拡散開始期の再検討」『先史学・考古学論究』V 上巻 龍田考古会
- 南健太郎 2013 「肥後地域における銅鏡の拡散・受容と廃棄形態」『弥生時代後期青銅鏡を巡る諸問題』九州考古学会
- 南健太郎 2016 「日本列島における漢鏡の東方拡散と保有・廃棄の意義」『考古学研究』第 62 巻第 4 号 考古学研究会
- 森岡秀人 1987 「「十」状図文を有する近畿系弥生小形仿製鏡の変遷」『文化史論叢』上 横田健一先生古稀記念会
- 森岡秀人 1993 「近畿地方における銅鏡の受容」『季刊考古学』第 43 号 雄山閣
- 吉田 広 2006 「四国・瀬戸内地域の集落出土青銅器」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会
- 渡部明夫 1991 「日本の大陸系青銅器 ②中・四国」『日韓交渉の考古学』弥生時代篇 六興出版

遺跡文献 ※ 番号は表 1 と対応

1. 神原英朗 1971 『便木山遺跡発掘調査報告』山陽町教育委員会
- 2・3. 神原英朗 1975 『用木古墳群』山陽町教育委員会
4. 神原英朗 1973 『さくら山方形台状墓』山陽町教育委員会
5. 正岡睦夫 1979 「鏡片副葬について」『古代学研究』90 号 古代学研究会
- 6・7. 白石太一郎・設楽博巳編 1994 「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 56 集 国立歴史民俗博物館
- 8・9. 島崎 東編 1995 『足守川加茂 A 遺跡・足守川加茂 B 遺跡・足守川矢部南向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 94 岡山県教育委員会
10. 近藤義郎ほか 1995 『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団
11. 正岡睦夫ほか 1984 『百間川原尾島遺跡』2 岡山県教育委員会
12. 湊 哲夫 1990 『美作の鏡と古墳』津山郷土館
13. 御船恭平 1959 「美作における弥生時代の墳墓について」『古代学研究』21・22 合併号 古代学研究会
14. 下澤公明・友成誠司 1977 『横見墳墓群』岡山県教育委員会
15. 高橋 護ほか 1986 「宮山墳墓群」『岡山県史』考古資料
16. 春成秀爾ほか 1969 「備中清音村鋳物谷 1 号墳墓調査報告」『古代吉備』第 6 集 古代吉備研究会

17. 平井典子編 1994『総社市埋蔵文化財調査年報』4 総社市教育委員会
18. 渡邊恵里子・團 奈歩編 2019『神明遺跡 刑部遺跡』岡山県教育委員会
19. 唐口勉三 1986「遺構と遺物」『亀山遺跡』広島県立埋蔵文化財センター
20. 高倉浩一 1981「E 地点 SD09 出土の鏡片について」『神辺御領遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター
21. 花本哲志ほか 1996『城山』広島県埋蔵文化財調査センター
22. 藤田広幸 1989「弥生時代の墳墓群」『壬生西谷遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター
- 23・24. 坂本一志 1998『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ 広島県埋蔵文化財調査センター
25. 桑原隆博 1982「釜鋳谷遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』3 広島県教育委員会
26. 中村真哉 1985「その他の遺構と遺物」『池の内遺跡発掘調査報告』広島市教育委員会
27. 植田千佳穂 1993『ひろしまの青銅器』広島県立歴史民俗資料館
28. 中田 昭 1977「真亀 C 地点遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会
29. 村岡和雄ほか 1992『奥ヶ原遺跡』山口県教育委員会
30. 乗安和二三 1992「伝熊毛町八代出土の内行花文鏡」『陶損』第4号 山口県埋蔵文化財センター
31. 石井龍彦ほか 1987『岡山遺跡』山口県教育委員会
32. 中村徹也ほか 1976『朝田墳墓群』Ⅰ 山口県教育委員会
- 33～35. 中村徹也ほか 1983『朝田墳墓群』Ⅵ 山口県教育委員会
36. 新江田智司ほか 1998『大内氏関連町並遺跡』山口県埋蔵文化財センター
37. 青島 啓 2006「下東遺跡第9次調査」『山口市埋蔵文化財年報』5 山口市教育委員会
38. 岩崎仁志ほか 1999『切畑南遺跡』山口県埋蔵文化財センター
39. 伊藤照雄ほか 1977『秋根遺跡』下関市教育委員会
40. 濱崎真二編 2010『延行条里遺跡』下関市教育委員会
41. 金関 恕 1971「稗田地蔵堂遺跡発見の蓋弓帽」『下関文化』第1号 下関市文化協会
42. 森本六爾 1927a「多鈕細文鏡考」『考古学研究』第1輯 考古學研究会
森本六爾 1927b「長門富任に於ける青銅器時代墳墓」『考古学研究』第2輯 考古學研究会
- 43・44. 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム編 2014『土井ヶ浜遺跡』下関市教育委員会
45. 濱崎真二 1997「柳瀬遺跡出土の鏡片」『柳瀬遺跡』下関市教育委員会

図表出典

- 図1 1：森本 1927a を一部改変、1'：森本 1927b より、2：御船 1959 より、3：坂本 1998 より、4：佐々木直彦編 1986『歳ノ神遺跡群 中出勝負峠墳墓群』財団法人広島県埋蔵文化財調査センターより、5：春成ほか 1969 より、6：中田 1977 より
- 図2 1－石棺復元図：森本 1927b より、1－銅鏡実測図：森本 1927a を一部改変、2：伊藤ほか 1977 より
- 図3 1：坂本 1998 より、2：中田 1977 より、3：村岡ほか 1992 より
- 図4 1：神原 1971 より、2：島崎編 1995 より、3：正岡ほか 1984 より
- 図5・表1 筆者作成